幕末に作成・刊行された和刻洋書　長崎版の素材と構造

鈴木　英治・切坂　美子

1．はじめに

本論文が対象とする和刻洋書とは、幕末に、金属活字による活版印刷によって、舶載された洋書の翻刻・編集などを行い、洋装本として作成し刊行された書籍のことである。

一般に日本での洋式製本が行われたのは、明治６（1873）年、お雇い外国人パターソンが印書局に招かれて教えたことに始まるとされている。しかし、既に幕末には蘭書をはじめ舶載された洋書を活版印刷によって翻刻した和刻洋書を作成・刊行している。その嚆矢が、長崎奉行が設立した活字版摺立所による和刻洋書で、長崎版と称されているものである。長崎版をはじめとする幕末の和刻洋書は、本の形態が江戸時代までの和装本から明治以降の洋装本へと変化する過渡期の緒にあたる。しかしながら、幕末の和刻洋書について、物としての素材・構造などについては未だ十分に調査研究がなされていない。

幕末に作成された和刻洋書の嚆矢である長崎版の素材や構造を調査し、物としての本という視点から和装本から洋装本への変遷について新しい知見を加えることが本論文の目的である。

調査は国会図書館所蔵の書籍および個人所蔵の書籍について、現物またはマイクロフィルムで実施した。また、早稲田大学図書館古典籍総合データベース[1)]の画像データベースを利用して当該書籍についての情報を収集し、また、本論文での画像として提示した。

2．和装本と洋装本

江戸時代までの日本における本の形態は、巻子本、折本、胡蝶装、粘丁装、綴葉装、線装本など多様であり、これらを総称して和装本とよんでいる。幕末においては、版本の大半の形態は四つ目綴じと呼ばれる線装本であった。一方、幕末の和刻洋書の底本となったのは主に19世紀前半に舶載された洋書である。和装本として線装本を、洋装本として19世紀前半の一般的な洋書を取り上げて比較すると、素材、印刷、構造の全てが異なる。和装本だけであった当時、洋装本として和刻洋書を作成する上で課題となることは何であろうか。

一つは、和装本と洋装本とでは必要とされる製本技術が全く異なり、構造としては洋装本の方が複雑なことである。線装本の下綴じや四つ目綴じは容易に習得できるものである。しかし、洋装本の綴じは、かがり台を利用して行い習得に若干の時間がかかる。また、製本してしまえば綴じがどのように行われているかは折丁毎に見える綴じ糸以外は見えず、その糸も完全にページが開かない限り見えないのである。表紙と本文の結合についても、線装本は本文と共に上綴じで綴じられていることがわかるが、洋装本の場合、製本後には支持体をどのように始末したのかは全く見えない。和刻洋書は技術的にも洋式製本を行なっているのか、それとも洋装本風に作られているのか、これが今回の調査での一つの着目点であった。

二つめは、和紙は活版印刷に対する印刷適性が低いことである。和紙に比べて洋紙は密度が高く、滲み止めの処理を施しておりペン書きや印刷に適する紙であった。しかし、幕末当時、

オランダから舶載される洋紙は高価な物であり、また、国産の洋紙が作られるようになるのは明治７年以降である。従って、幕末に金属活字による活版印刷で和刻洋書を作成するためには、高価な洋紙を使用するか国産の和紙を印刷に適するよう加工して使用するかのどちらかであった。諸文献では、多くの和刻洋書の紙を和紙としており、楮紙あるいは斐紙等の記述もあるが、どのような加工を施して印刷適性をもたせたのかについての具体的な資料はなかった。今回、本文用紙の分析調査によって、印刷適性を上げるための和紙の加工について新たな知見を加えることができた。

三つめは、同じく紙ではあるが、洋装本の表紙に使われる板紙の問題である。日本で初めて手漉板紙が作られたのが明治10年であり、明治20年に洋式板紙工場が建設された[2)]。従って幕末であれば板紙も本文の紙と同じく、高価な舶載されたものを使用するか、従来の和紙を使用するかしかなかったのである。ただ、本文紙と違い板紙には印刷をするわけではなく、また板紙は表面には出ないものである。従って、敢えて高価な舶載品を使わずに和紙を使用したと考えられる。今回調査した和刻洋書のうち、虫損やめくれによって表紙の板紙が見えるものについては目視によりその素材を推定した。

四つめは、印刷における版面構成とそれに伴う折丁である。線装本は、一枚づつ２頁分を片面印刷している。しかし、19世紀前半の舶載洋書は両面印刷であり、全紙の両面にそれぞれ８頁分やあるいは４頁分を印刷してそれを折りたたみ１折丁とする。このような印刷をするには大きな紙が必要である。和刻洋書は底本と同様のサイズの紙を用意して１折丁としているのか。あるいは底本とは違う形で折丁を作成しているのかである。この折丁の構成については、各和刻洋書の紙の質、表裏を詳細に観察して見極める必要があり、調査はしなかった。しかし、折丁の構成と連動する折記号を調査し、文献にある折丁の構成の記述も参考にして折丁について考察した。

３．長崎版の概要

３―１．長崎版の作成・刊行の歴史的背景

18世紀後半以降、日本沿岸にロシア、イギリス、アメリカなどの船が頻繁に来航するようになった。そして、嘉永６（1853）年のペリー来航とそれに続く翌1854（安政元）年の日米和親条約の締結、続いてイギリス・ロシア・オランダとの締結によって鎖国体制は崩れ、欧米列強への対応が急務となった。このような状況にそれまで以上に蘭学を学ぶ者が増え、蘭書の需要も増加した[3)]。が、当時はまだ蘭書をはじめとする洋書は、出島に来たオランダ商館員の私的な荷物として輸入されるにすぎなかった。このような中、安政２（1855）年６月、長崎奉行が老中阿部正弘に「活字版摺立所」の設立について建白したのが「阿蘭陀活字版摺立方之儀ニ付奉伺候書付」である。この書付で、「兎角注文通り部数持渡不申」、「蘭書払底」とあり、諸方からの蘭書の需要増大に対してオランダ商館からの供給が追い付かないことを述べている。鎖国下の江戸時代にヨーロッパの情報・学問を知るために学ばれたのはオランダ語による蘭学であり、日米和親条約に続いて日英、日露和親条約が既に締結されているこの時点においてもオランダ語の書籍である蘭書が求められたのである。この書付には、活版印刷機材として「先年紅毛人持渡候蘭書活字版」があり、試したところ相応にできたこと、印刷の底本とする蘭書については「当節必要之書籍類種本有之分」と述べ、手元にある蘭書を底本として刷ることを述

べている。活版印刷機材は、嘉永元（1848）年にオランダから舶載された活版印刷機や欧文活字類を本木昌造ら４人の阿蘭陀通詞が購入しており、これを長崎奉行所が買い戻して利用するというものである。また、この書付では、嘉永３（1850）年に幕府が出した蘭書に対する規制を順守することが述べられ、それを示すものが長崎版にある「長崎官事點検之印」朱印の押印であると推測できる。

３―２．刊行された長崎版について

安政３年から安政６年までの約４年間に「活字版摺立所」による刊行物として、長崎版と呼ばれる蘭書の翻刻による和刻蘭書は、神崎『天理図書館蔵の長崎版並びに出島版について』[4)]『幕末の洋学事情と蘭書復刻』[5)]では以下の①～⑦の７タイトルを紹介している。福井[6)]は５タイトル、高野[7)]は５タイトル、川田[8)]は６タイトル、中根[9)]は５タイトルを挙げている。なお、『洋学史事典』[10)]には「『出島版』刊本試目録」として15タイトルが掲載されているが、この目録には本論文では区別している長崎版と出島版の両方が含まれており、他の文献での区分で判断して長崎版に限れば７タイトルである。

次に、神崎が紹介している７タイトルの各書籍①～⑦について概要を述べる。タイトルに続く（　　）内の名称は、俗称または日本名として使用されている呼称のいくつかである。

① *Syntaxis, of woordvoging der Nederduitsche taal*.（『シンタキス』、『セインタキシス』、『和蘭文典成句論』）オランダ語の文法書。安政３（1856）年刊。底本は1846年オランダのライデンで刊行された。

② *Weiland, P., Nederduitsche spraakkunst.1856*.（「ウェイランド『和蘭文法書』」、「ウェイランド『スプラーク・クンスト』」）オランダ語の文法書。安政３（1856）年刊。底本は1820年オランダのドルドレヒトで刊行された。『洋学史事典』の目録では、底本の年代が1846年となっている。なお、福井、高野、中根はこの翻刻を取り上げていない。

③ *Reglement op de exercitien en manoeuvres der infanterie*.（『レグレメント』、『歩兵教練並びに演習規則集』、『歩兵操典』）。兵学書。３巻３冊からなる。安政４（1857）年刊。底本はオランダのブレダで刊行された。底本の刊年について前述の各文献では、３巻とも1855年刊行となている。しかし、今回、国会図書館にて、著者らが翻刻の底本と同種と推測できる第１巻から第３巻の原書、並びに翻刻される予定だった第４巻の原書について調査したところ、第１巻、第２巻の刊年は1855年であるが、第３巻、第４巻の刊年は1856年であった。

④ *Van der Pijl's gemeenzame leerwijs voor degenen die Engelshe taal beginnen to leeren*.（『英文典初歩』、「ファン・デル・ペイル『ゲメンザーメ・レールウェイス』」）オランダ語による英語の文法書。安政４（1857）年刊。底本は1854年オランダのドルドレヒトで刊行された。

⑤ *Volks-natuurkunde of onderwijs in de natuurkunde voor mingeoefenden*.（『理学訓蒙』、『格致問答』、「ヨハネス・ボイス『ヴォルクス・ナトールクンテ』」）。物理学入門書。安政５（1858）年刊。底本は1811年オランダのアムステルダムで刊行された。

⑥ *Weiland, P., Kunstwoordenboek*.（「ウェイランド『キュンスト・ウォールデンブック』」、「ウェイランド『学術用語辞典』」）。辞書。安政５（1858）年刊。底本は1846年オランダのドルドレヒトで刊行された。なお、福井、高野、川田は、この翻刻を記載していない。

⑦ *Weiland, P,. Nederduitsche spraakkunst.1859*.（「ウェイランド『和蘭文法書』」、『和蘭文範』）。

オランダ語文法書。安政６（1859）年刊。底本は1846年オランダのドルドレヒトで刊行された。なお、『洋学史事典』では1854年ドルドレヒト版となっている。

以上が、活字版摺立所にて翻刻された和刻蘭書である。上記②は国会図書館の所蔵および早稲田大学古典籍総合データベース画像を確認できなかった。②以外については、現物もしくは原書についての調査を実施した。

４．長崎版の調査結果と考察

表１は、今回調査した国会図書館所蔵および個人蔵の長崎版と、国会図書館所蔵の原書の一覧である。書名とその数字は上記３―２．刊行された長崎版について　の①～⑦に該当する。個別の調査結果については、『レグレメント』を中心に記載した。早稲田本とあるのは当該書籍の早稲田大学図書館古典籍総合データベースからの情報収集である。

表１　装丁について

書名（1）	装丁	背の形	背箔押し	平の模様（2）
①シンタキス（マ）	―	―	―	―
③レグレメント第１巻	半革装	角	有り	茶マーブル様
③レグレメント第１巻（個）	半革装	角	有り	茶マーブル様
③レグレメント第１巻（原）	**半布装**	**角**	**無し**	**ストーモン様**
③レグレメント第２巻	半革装	角	有り	茶マーブル様
③レグレメント第２巻（原）	**半布装**	**角**	**無し**	**スパニッシ**
③レグレメント第３巻	半革装	角	有り	茶マーブル様
③レグレメント第３巻（原）	**半布装**	**角**	**無し**	**スパニッシ**
③レグレメント第４巻（原）	**半布装**	**角**	**無し**	**スパニッシ**
④英文典初歩	半革装	角	有り	茶マーブル様
④英文典初歩	半革装	角	有り	茶マーブル様
④英文典初歩（原）	**半革装**	**丸**	**有り**	**スパニッシ**
⑤理学訓蒙	半革装	角	有り	茶マーブル様
⑥ウェイランド『クンスト・ウォールデンブック』（原）	**半革装**	**丸**	**有り**	**スパニッシ**
⑥ウェイランド『クンスト・ウォールデンブック』（原）	**半革装**	**丸**	**有り**	**スパニッシ**
⑦和蘭文法書	半革装	角	有り	茶マーブル様
⑦和蘭文法書（マ）（原）	**―**	**―**	**―**	**―**

(1)：（マ）はマイクロフィルムによる調査であり、この表の項目は不明または推定のため―とした。
（個）は個人蔵である。（原）は原書である。原書はゴシックとした。

(2)：茶マーブル様は、茶色の地にＳ字状、あるいは樹状などマーブル様の模様が施されているもの。
ストモーン様はマーブル紙の見本[11]の中でもっともそれに近いと判断したもの。

4―1．装丁について

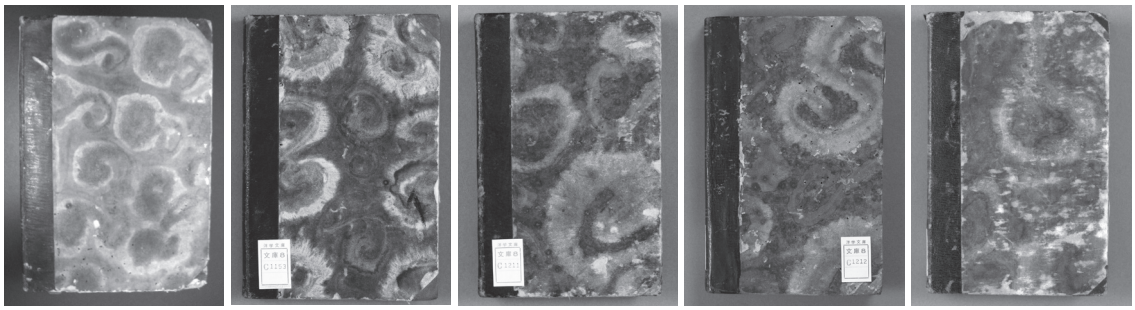

図１　表紙　左から『レグレメント』第１巻（個人蔵）、『レグレメント』第２巻（早稲田本）、右３冊はいずれも『英文典初歩』（早稲田本）

表１のように、原書はタイトルによってその装丁が異なっている。大きさが縦150㎜ほどで厚さ９㎜～12㎜と小型の『レグレメント』第１巻から第４巻まですべて半布装・角背で箔押しがない。これより大きい、縦170㎜厚さ15㎜の『英文典初歩』と縦225㎜厚さ40㎜の『クンスト・ウォールデンブック』は半革装、丸背で箔押しがある。それに対し、調査した長崎版の大きさは、縦180～200㎜であるが、全て**図１**のような角背で半革装、背には箔押しがある。長崎版は原書に比較して本文紙が厚いため、本の厚さも原書よりも厚くなっているが、長崎版には丸背が無い。丸背が無いのは、角背と異なり丸背にするためにはバッキング、溝付けなどの工程が必要であるため、その技術を習得していなかったことが疑われる。

図２
スパニッシの表紙
（早稲田大学図書館）

表１にある長崎版の平の茶マーブル様とは、それぞれ模様は異なるが、**図１**に類似したもので、茶色の地をもつマーブル様の和紙が使用されている。これらの茶マーブル様の平が長崎版の原装であると推測できる。原書では**図２**のようなスパニッシのマーブル紙が多く使用されており、長崎版の茶マーブル様とは全く異なる。長崎版のようなマーブル様の模様は欧米のマーブル紙には例がないものである。従って、オランダからの輸入品ではなく、国内で作ったものである。このようなマーブル様の紙をどのように作成したのかについては不明である。しかし、フランス語の家庭百科事典『ショメール』のオランダ語版には、マーブル紙の作り方が載っており[12]、18世紀後半には阿蘭陀通詞の中に所有していた者がいる[13]のである。また、舶載される洋書は全てその内容を吟味するために阿蘭陀通詞を通すことになっており、多様な西洋の技術等に触れる機会が最も多かったのが阿蘭陀通詞と言えるのである。長崎版の作成の中心となったのは本木達阿蘭陀通詞であったことを考えると、彼らがこのようなマーブル様の紙を作成できたことは十分に考えられるのである。

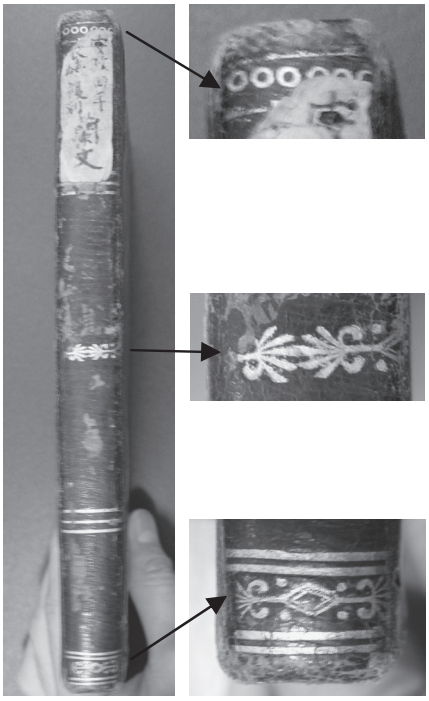

図３　第１巻の背の箔押し
上から天、真中、地（個人蔵）

４―２．箔押しについて

図３は個人蔵『レグレメント』第１巻の背の箔押しである。天には小さな○が６つ並んでいる。真中と地は一見違う模様に見えるが、向かい合う向きを反対にしたもので、模様の形式は同じである。間は横線が３本施してある。国会本『レグレメント』の３巻ともに横３本線の位置は**図３**と同じである。第１巻には天と地は**図３**と同じで真中は**図３**の地と同じ模様が、第２巻は天と地に**図３**の地の模様、真中には**図３**の天の模様が、第３巻には**図３**と全く同じ箔押しが施されている。早稲田大学図書館古典籍データーベースには背の画像は無いため、早稲田本については不明である。原書は４巻のいずれにも箔押しはない。

表１のように『レグレメント』以外の長崎版にも背に箔押しがあるが、箔押しに使用されている金型の種類は、『レグレメント』で使用されていた、横線と○、模様一種類の３種類だけである。この３つの模様をタイトルごとに位置や向きを変えて使用したと推測でき、金型はこの３種類の準備だけであったと思われる。

４―３．綴じについて

図４は綴じ方のモデルである。

『レグレメント』の場合、個人蔵『レグレメント』第１巻、国会本の３巻とも、綴じ穴は５つであり、国会本では３巻とも真中３つの綴じ穴箇所に支持体を使用していることが確認できた。個人蔵第１巻と国会本第１巻の綴じは、C-B-A-A-B-B-A、第２巻はB-A-A-B-B、第３巻はA-B-B-A-A-B-B-A-A-Bとなっており、２丁重ねの抜き綴じ[14) 15)]になっている。早稲田本『レグレメント』第１巻は国会本第１巻と同様である。第２、第３巻については綴じ糸が十分に確認できないため不明である。『レグレメント』の原書は第１巻から第４巻までの４冊すべて、綴じ穴が２つの仮綴じ（**図４**）で支持体は使用していない。また、支持体の端の始末は、国会本第２、３巻で調査することができた。どちらも、表紙の板紙に貼った化粧紙と平や革を貼っている和紙との間に支持体の先を扇状に広げて貼りこんでおり、洋式製本の支持体の始末の方法で行っている。

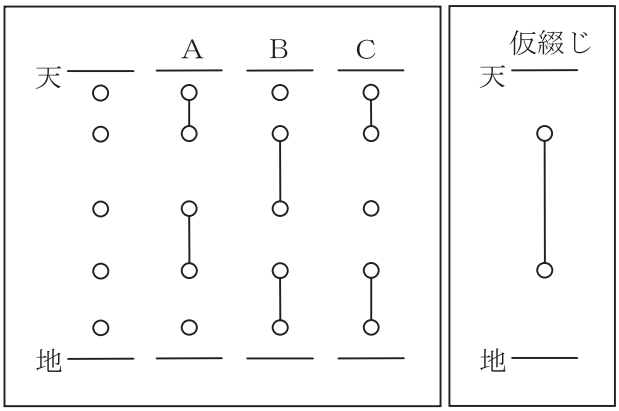

図４　綴じ方のモデル　○は綴じ穴、―は綴じ糸を示す

最初の刊本である『シンタキシス』が１丁ごとの抜き綴じであるのを除き、**表１**にある長崎版はすべて２丁重ね抜き綴じをしている。洋書では、抜き綴じをする場合、綴じをしっかりとさせるために、最初の折丁もしくは２折丁目まではすべての穴に糸を通す本かがりをすることが通常行われるやり方である。これが長崎版最後の刊行物である『和蘭文法書』で初めてなされており、より、製本技術が向上したと推測することができる。長崎版が主として２丁重ね抜き綴じであるのに対し、原書の綴じは、『レグレメント』は簡略な仮綴じであり、『英文典初歩』と『クンスト・ウォールデンブック』は、綴じ穴・支持体から判断して、仮綴じではなく、本かがりか抜き綴じである。仮綴じは単純な綴じであり２丁重ね抜き綴じの方法が理解できていれば十分に可能である。本かがりも手間はかかるが、綴じ方としては２丁重ね抜き綴じよりも

複雑ではない。従って、長崎版は単純に底本の綴じをまねたものではなく、選択的に２丁重ね抜き綴じを行ったのではないか、と推測する。

４―４．折丁について

折丁の構成は、長崎版も原書も、最初の折丁と最後の折丁では４葉８頁、あるいは２葉４頁などとなっているが、それ以外では８葉16頁を１折丁とするオクターボ版の形となっている。折記号の付き方は、長崎版と原書とを比較することが出来るものでは、長崎版に一部欠落が見られるものの、使用している記号、番号、折丁の各葉への振りは全く同じで、折丁と折記号とが対応する付け方である。さらに、折記号はラテン文字を使用しており、ラテン文字にはJ･U･W の３文字が無いためは使用しない。原書でこの３文字が使用されていないことは勿論であるが、長崎版でも使用されていない。

『レグレメント』の場合も折記号は国会本と早稲田本ともに、原書と同じように振られている。振り方は、第1、2、3巻とも、最初の折丁には折記号は無く、２つめの折丁から折記号が付いている。折記号は、第１巻であれば、巻を示すローマ数字“Ⅰ.”と折丁順を示す数字“１”、次の紙葉に“１*”が振られている。３折丁目以降にも巻を示すローマ数字が振られ、アラビア数字の部分が折丁順に“２”“２*”、“３”“３*”と振られている。国会本、早稲田本共に、第１巻の“６*”、第３巻の“６*”“10*”が欠落している。**図５**は早稲田本第３巻に見られる折記号で、第３巻を示す“Ⅲ”と折丁の順番を示す“５”がページの下に印刷されている。国会本第１、２、３巻と個人蔵第１巻、早稲田本第１巻の折丁の構成は、綴じ糸から確認できた。折記号の無い最初の折丁は４葉８頁、２つめの折丁以降は８葉16頁であり、折記号と折丁構成が一致しており、原書の折丁の構成と同じである。早稲田本第２・３巻については、綴じ糸が確認できず折丁の構成は不明である。

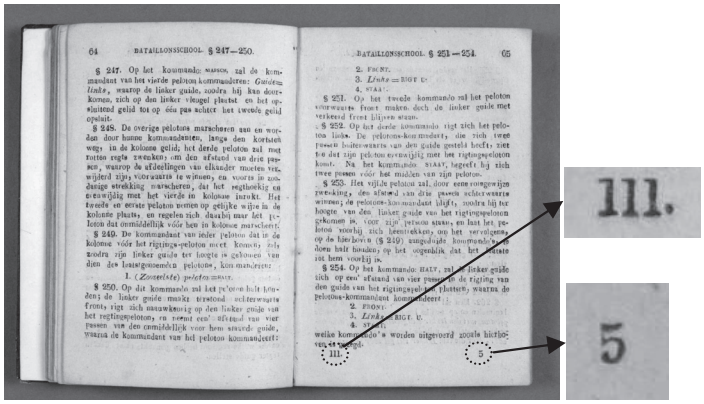

図５　第３巻の折記号（早稲田本）

本来、折記号は、製本をするときに各折丁を順番に重ねる「丁合い取り」を簡単に行うために付けられたものである。折記号が８葉毎に出てくる折丁は、一枚の紙に表裏それぞれ８ページ分ずつ版を置いて印刷し、それを折りたたんだものが１折丁となっている。しかし、長崎版の印刷は、見開き毎の印刷であろうと推測されている[16) 17)]。見開きで裏表それぞれ２ページ分ずつ版を置いて印刷し、それを４枚重ねて８葉16頁にして１折丁を構成しているというものである。そうであれば、長崎版に原書と同様に付いている折記号は「丁合い取り」のためにつける、という本来的な意味をなさない。単に原書についている通りに振った、ということを意味する。

４―５．紙について

『レグレメント』個人蔵第１巻の紙の素材を分析した。分析の結果、原料は楮、繊維の流れ

から漉き流しで作られた紙であり、顕微鏡写真（**図６**）から楮繊維が強く切断されて短かいこと、Ｃ染色液染した繊維に小さな粒子が沢山ついている（**図７**）ことから米粉が多量に加えられていることがわかった。また、水の吸収が遅いことから膠などの表面処理が行われていることも判明し、特殊な用途に使うために作られた紙であるとの結果がでた[18]。

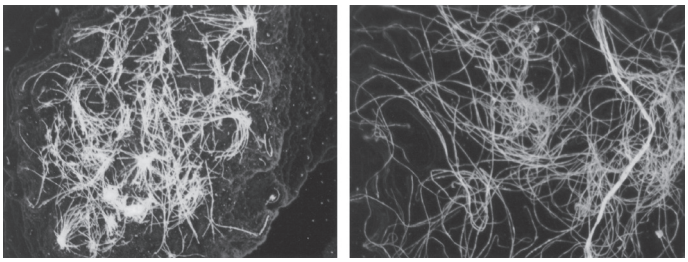

図６　楮繊維の写真　　左：第１巻の楮繊維（個人蔵）
右：一般的な和紙の楮繊維

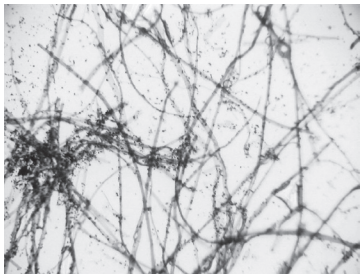

図７　第１巻（個人蔵）の紙の
Ｃ染色液染

このような繊維を短く切る、米粉を入れる、打ち紙をする、という加工は、繊維長の長い楮の繊維を切ることで紙の密度を上げる、米粉を入れることで透明度を下げ、かつ紙の密度を上げる、打ち紙をして紙の密度を上げるとともに表面の平滑さを出すための加工を行ったと考えられる。楮紙を洋紙に近付け、印刷適性の良い紙にするための工夫である。 このような和紙の加工技術は従来から継承されてきた技術であり、洋紙を作るために開発されたものではない。

紙は、国会本『レグレメント』第１巻の平が不明であったことを除き、表紙の平、見返し、本文すべて和紙である。表紙の板紙の素材もめくれなどから見えた部分から判断して、和紙を重ねて利用したものであると判断できた。長崎版で利用した紙については、活字版摺立所設立の建白書を提出する一ヵ月前の安政２（1855）年５月には阿蘭通詞品川藤兵衛が「オランダの紙に似せた紙を用意」したことがオランダ商館長の日記に残っている。オランダの紙に似せた紙、すなわち洋紙に似せた紙を準備したということである。『ショメール』には洋紙の作り方も書いてある[19]が、長崎版の刊行に関わった本木達阿蘭陀通詞達はオランダの紙がどのような物かを日常的に知りえる立場であった。それを考えれば、和紙をオランダの紙に似せた紙にして用意することは十分可能なことであったといえる。オランダから輸入する高価な洋紙ではなく、和紙を洋紙に近付ける目算は十分にあり、国産和紙での印刷を当初から考えていたと推測する。

４―６．刊記について

図８は個人蔵『レグレメント』第１巻の２葉目に押された朱印である。上に「安政丁巳」（安政４年）、下に「長崎官事點検之印」がある。国会本第１、２巻は２葉目に、第３巻は見返しの右側の遊び紙に同様の朱印がある。早稲田本第１、２巻も２葉目に同様に朱印がある。しかし、早稲田本第３巻にはない。これは、早稲田本第３巻の見返しは本文とは全く色が異なることから、原装ではないためであると推測できる。**表１**

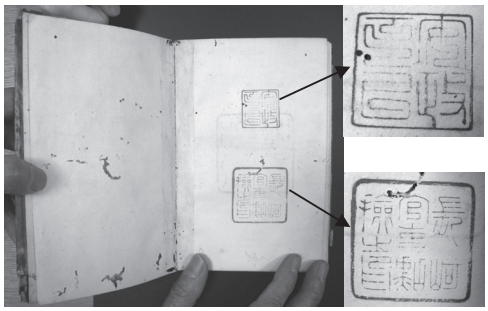

図８　第１巻の朱印（個人蔵）

の長崎版には、同様の朱印の押印があった。

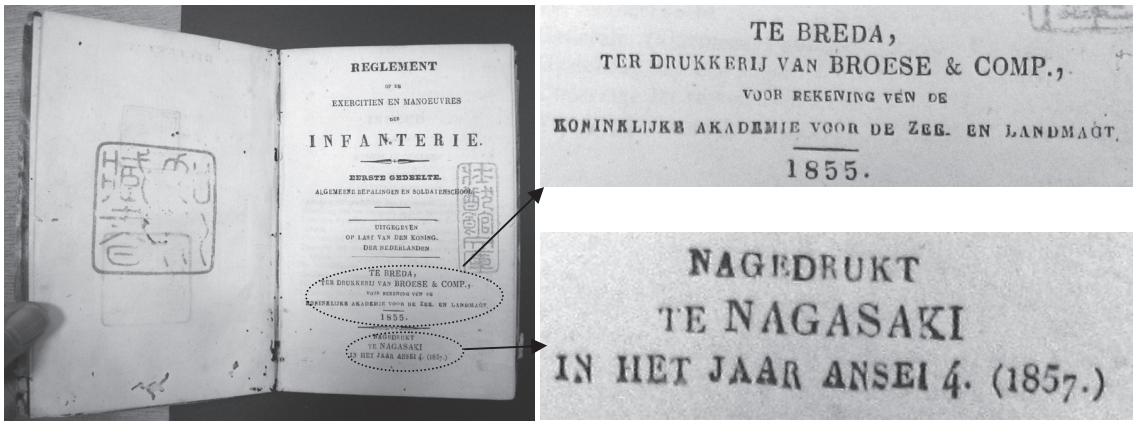

図９　第１巻タイトルページ（個人蔵）（上）底本の刊記　（下）和刻の刊記

また、**図９**は個人蔵『レグレメント』第１巻のタイトルページである。底本と和刻の刊記があり、安政４（1857）年に長崎で翻刻したことが印刷されている。

長崎版の最初の刊本である『シンタキス』には**図９**に見られる和刻を示す刊記が無い。また、**図 10** は早稲田本『レグレメント』第３巻のタイトルページで、国会本第３巻と同じであるが、刊記は刊行年“1855”のみで刊行場所、和刻であることの刊記が無い。しかし、この２冊以外の長崎版には**図９**のような底本および和刻の刊記が記されていた。

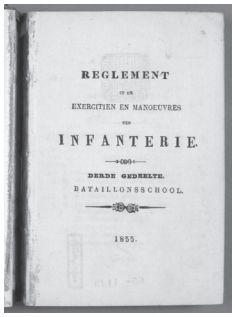

図10　第３巻
タイトルページ
（早稲田本）

４―７．印刷について

長崎版は概してどれも印刷は稚拙である。長崎版が長崎版であると一目でわかるのは、その印刷の稚拙さによるとするぐらいである。活字版摺立所が江戸町五ケ所宿老会所内に移転した後、活版技師インデルマウルの技術指導を受けたとされている。しかし、今回、その刊行年から、インデルマウルに技術指導を受けた後の刊行物と考えられる長崎版『理学訓蒙』、及び『和蘭文法書』の現物を調査する機会を得たが、どちらも印刷の出来は拙劣であった。「安政三年のと、同六年のとを比べてみれば明らかのように、四年間も印刷していながら、印刷技術はほとんど進歩した様子がみられない」[20] ものであった。インデルマウルは、出島のオランダ商館に設けられたオランダ政府直営の印刷所での指導に当たっている。そして、ここでの刊行物が出島版であり、今回出島版についても調査をしたが、出島版の出来は長崎版とは雲泥の差であった。長崎版と出島版の両者を比較すると、インデルマウルは活字版摺立所での実質的な技術指導は行わなかった、というのが筆者の結論である。

５．まとめ

長崎版の印刷は稚拙であるが、製本そのものは良好である。綴じもしっかりしておりおおむね良好である。綴じに使用した支持体の始末も端を扇状に広げ、板紙と表紙の間に貼りこむなど洋書の作りを踏襲している。従って、長崎版は単に舶載洋書を見よう見まね、試行錯誤で作

成したものではなく、誰から学んだのかは不明であるが一定の洋式製本技術を学んで作られたものであろうと推測できる。長崎版は、舶載洋書以外はすべて和装本であった当時において、洋書らしい洋書の体裁・構造を追求し、まさに国産の蘭書としての和刻洋書を作成・刊行したといえる。これには、本木昌造や品川藤兵衛などの阿蘭陀通詞が中心となったことは重要なことである。洋書とはどのような物か、様々に異なる内容とは別に外見や物としてどのような物なのか、多くの洋書に接しその共通点を捉えられる立場にいるのは、当時阿蘭陀通詞に勝るものはいなかったはずである。

長崎版の和刻洋書は、国産の和紙を従来の加工技術を駆使して印刷適性を上げて金属活字による活版印刷を行い、装丁が単に洋装であるだけでなく綴じなど本としての構造においても洋式製本が行われており、まさに日本における洋装本の嚆矢であるといえる。

今回の現物調査は国会図書館所蔵分だけであったが、他の機関が所蔵する者を調査することによって更に幕末の和刻洋書の姿が明確になると考えている。

引用文献・参考文献

1）早稲田大学図書館：早稲田大学図書館古典籍総合データーベース，（2011 年 1 月 5 日），＜http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ ＞.

2）渡辺勝二郎：“紙の博物誌”，pp. 77 － 79（1992），（出版ニュース社）.

3）神﨑順一：“幕末の洋学事情と蘭書復刻”，日本の近代活字　本木昌造とその周辺，pp. 55（2003），『日本の近代活字　本木昌造とその周辺』編纂委員会，（ＮＰＯ法人　近代印刷活字文化保存会）.

4）神﨑順一：“天理図書館蔵の長崎版並びに出島版について”，ビブリア，103 ，pp158 － 156、133 － 131（平成７）.

5）神﨑：前掲“幕末の洋学事情と蘭書復刻”，pp. 63.

6）福井：“江戸幕府刊行物”，pp. 181 － 188（昭和 62 年第２版），（雄松堂出版）.

7）高野　彰：“第５章　幕末の洋書印刷物　活字による見分け方”，本と活字の歴史事典，pp. 400 － 402（2000），印刷史研究会編，（柏書房）.

8）川田久長：“阿蘭陀伝来の活版術”，蘭学資料研究会研究報告，73，pp. 259 － 256（1960）.

9）中根　勝：“日本印刷技術史”，pp. 202（平成 12），（八木書店）.

10）日蘭学会：“洋学史事典”，pp. 470 － 471（1984），（雄松堂出版）.

11）三浦永年：“魅惑のマーブル・ペーパー”，pp. 56（1988），（アトリエ・ミウラ）.

12）杉本つとむ：“江戸時代西洋百科事典－『厚生新編』の研究－”，pp. 195 － 196,205 － 206（平成 10），（雄山閣）.

13）杉本：前掲“江戸時代西洋百科事典－『厚生新編』の研究－”，pp. 40 － 41.

14）高野　彰訳：“西洋の書物―エズデイルの書誌学概説”，pp. 181 － 182（1972），（雄松堂書店）.

15）MiddletonC.Bernard：“The Restoration of Leather Bindings”，pp. 91 － 92、94（1972），（American Library Association，Chicago）.

16）高野：前掲“第５章　幕末の洋書印刷物　活字による見分け方”，pp. 423.

17）神﨑：前掲“天理図書館蔵の長崎版並びに出島版について”，pp. 136 － 135.

18）宍倉ペーパー・ラボにて実施（2010 年 1 月 13 日）
19）杉本：前掲“江戸時代西洋百科事典－『厚生新編』の研究－”，pp. 193 － 195、201 － 203.
20）高野：前掲“第 5 章　幕末の洋書印刷物　活字による見分け方”，pp. 402.